

四十年十二月

土尔扈特郡王巴尔塔氏家
屋税免除特典ヲ附與セ
ル

外務省

土爾扈特郡王巴爾塔、特權ニ関スル件

武田書房

蒙古王ハ左記諸点ニ基キ國際法上法外法權ヲ有ス
モニ非ス

一、蒙古諸郡王、支那皇帝ニ對スル關係ハ五降法上附庸王或ハ屬王ト移スルモノニ相當ス而シテ附庸王或ハ屬王トシテ

四十二年三月廿日 編輯 續

外務省

屬王ノ主長ハ五降法上法外法權ヲ享有スルモノニ

非サルヲ通論トス

理由

一、蒙古郡王ハ左記諸点ニ依リ附庸王ナリ

一、蒙古ハ清國領土ノ一部ヲ構成スルモノニシテ清國皇帝

ニ對シ服従ノ地位ニ立ツ又外交上ノ單位ニ能ハス

二、蒙古ハ他ノ一部主權國ノ如ク條約ニ依リ權利ヲ享有ス

一部ヲ制限スルニ非リ其内政全部又ハ一部ヲ覆ミテ
其内政ヲ行フ事ニ非ス故ニ彼令特別ニ行使ニ得ル
内政ハ自由モ隨時ニ其ノ本玉ニ於テ制限ニ得
ルモノトス

四蒙古郡王ハ元託國降法上通論ニ基キ治外法權ヲ有セズ
一附庸玉ノ主長ハ其ノ本玉元首ニ對シ臣民ノ地位
ニ立ツ(國降法上ノ見地)

二附庸玉ノ主長ハ單獨ニ對外主權ヲ行使スヲ得ス

三附庸玉ノ主長ハ單獨ニ治外法權ヲ有スルモノトス

外務省

二蒙古郡王ハ身分上清玉皇族ノ列ニ加フキモノナ
リ而シテ主降法上外玉ノ皇族ハ單獨ニ治外法權ヲ
有セザルヲ通論トス

理由

一蒙古王ハ左記諸点ニ基キ清玉皇族列ニ入ルキモノ
トス

一清朝明ヲ亡スル時元朝ノ遺族之ニ參テカアリ

清朝之徳文康熙三十七年（今ヨリ二百有年前）
 準噶爾カ外蒙ヲ討伐スル時民衆相議シテ西路
 云ニ投スルコトヲ止テ清朝ニ投帰ス新疆一帯ノ王
 族ハ皆旧土爾扈特、米爾因ミテ清朝其ノ勢力ヲ
 恐レ其ノ一致ヲ防カス爲メ之ヲ各地ニ封シ王爵ヲ興ツ
 蒙古ノ王爵ハ汗王、親王、郡王、貝子、貝勒トナシ
 支那本島ニ於テハ清皇族ト式格ヲ同クシ
 外 務 省
 故ニ血族ニ依ル皇族ニテ政治ニ与テ皇族ハ
 此地位ニ在リテ要スル所
 口左記ニ降法上ノ諸臣ニ基キ外王ノ皇族ハ法外法
 権ヲ享有セサルヲ通稱トス
 以外王君主法外法権ハ王家ノ平等権ニ基キ
 其ノ尊稱ノ完全ヲ期シ主権者タル地位ニ缺ク
 此所ナカラズカ爲メニ其ノ身辺附屬ノ人乃物ニ

對シテ第五ノ法規ノ行使ヲ止ムルナリ故ニ元首
ニ伴隨セル從者家族ハ治外法權ヲ持テ波及
ヲ受ク^{（其ノ）}主權者ニ非^{（ズ）}ル者ハ單獨ニ治外法權
ヲ享有セズ

（一）皇室ハ外王皇族ノ君主ト同行セザル場合ニ於テモ其ノ
君主ヲ尊敬スルノ余波トシテ諸種ノ特權ヲ認ムルコト
アリ之レ決シテ五條法上ノ理論ノ結果ニ非ス

外務省

結論

上述諸侯^{（ハ）}土爾其^{（ハ）}特許王^{（ハ）}巴爾塔^{（ハ）}其ノ附庸^{（ハ）}
主長^{（ハ）}地位^{（ハ）}國^{（ハ）}主皇族^{（ハ）}地位^{（ハ）}ニ於テモ國際法
上治外法權ヲ享有スルノ論據ナキト論決ス
然レトモ^{（君主ト同行セザル）}他^{（ハ）}主^{（ハ）}族^{（ハ）}ニ對シテ或種ノ特權ヲ享有セム
ルニ必要ナリ特別ノ好誼ニ基クモノニテ元々自由ナリ
唯之レ國際法上ノ議論ニ非ザルニモ

巴爾塔王ニ對スル帝公、特別待遇

巴爾塔王ノ尤記諸公ニ基キ帝公政府ニ於テ特別ノ敬意ヲ表シ尊稱、免稅、特權ヲ享有セラルヲ至テ留ナリト思惟ス

一、巴爾塔郡王ハ清王皇族ノ列ニテ、^會式格特ニ他ノ皇族ノ

上ニテリ

一、蒙古郡王ハ由來努カニ團體ノ主長ニシテ其、^{王人}難世ニ對シ

行政主裁斷ノ權能ヲ有シ清王政府モ歴史上之ヲ

外務省

賓客トシテ過シ来ルコト

一、帝公ハ明文上^陸陸王ハ政府並皇室ヲ尊重シ

如喜ヲ表スル信果然、^勅勅カ^ル郡王ニ對シ特別ノ待

遇ヲナスヲ至古トス

注意

巴爾塔王ハ在蒙、^為本年^即ニ帝在ス元ヲ一旧私人^タノ資格ナリ

故ニ其、特權ト^果然^ナシ^タ得ス之畢竟^帝帝公ニ對シ

王ニ敬意ヲ表セシメ、特ニ待遇スル所ニシテ他ノ外王主権
者ニ対スルコト稍其趣ヲ異ニセザルを得ス
特待ノ範圍（下江四種ノ特権ハ普同外王主権者ニ対スルコト）
才一其地數言案權ハ行使スルコト（郡王一個身上ニ限ル）
才二免稅（但知人ノ受クテテ即無便稅、不納產稅、壹買契稅、主稅
等ハ其限ニ在ラズ）
才三刑事裁判ノ免除
才四民ヲ裁判ノ免除（是ハ郡王一個知人ノ資格ニ於テ限ラ

スハシニ依リ全然有る所ナリ
附屬國ハ屬國ノ意ヲ本論紀章者ノ意ニ如ク解ス時ハ蒙古ハ所謂主權國ニ非ス
從テ國際法上國トシテ存スルハハカニヤリ然レトモ或ハ從國トモ或ハ附屬國トモ云フモノナリ
半主權國ト看做ス者ナキニ非ス尤モ從國トシテ解ス時ハ其從國ノ主權ノ領土外ニ存在スルモノ
ルカラス本論點ニ依リ蒙古ハ清國ノ領土内ニ在リト云フハ現今一般ニ認メラル所ナリ由來據テ
三龍ノ世界ニ帝國主義ノ行ハレタル所現存朝ハ今地理上ノ支那ヲ認メシムト稱スル蒙古王ノ
如キ其共同體ノ一勢力ヲ失フモノナリ蒙古ハ附屬國ノ領土内ナリト云フハ實ハ現存朝ノ
領土外ニ在リ從國朝貢國ノ一ニシテ主權從國ト清國トテ併セムモノナリ支那ト云フハ國際法上
一箇ノ主權ト看做サルニ非サルカ
附屬國ノ主權ハ清國ノ主權ニ依リテ存スルモノナリ
附屬國ノ主權ハ清國ノ主權ニ依リテ存スルモノナリ

相模上三毛の件
上三毛の遺考はなほ
有る
（上三毛ノ領地は地
図等上青森一都ノ

以上王領土地
 國陸上清國一部
 成江步別國陸上
 國寧成之洲之江上
 以上國陸上清國
 以上國陸上清國

一、清國に在る主國一部
ヲ構成する國其
ニトハトノヤト區別シテ
湯ヲ立スル必要アリ
(2) トハト王清國風土上
皇族ト同視スルヤト看
ルニ皇族に國籍上皇族
ハ

海ヲ立ルノ必要アリ

(2) 日本王清國ノ風土

皇族ト同視ニスルヲ看

做ス皇族ニ同視スルヲ終

國ニ特權ヲ有スルヲ望ム

此ノ風土ニ海トシテハ家屋

既更障ノ必要アリ

(3) 以上ハ國土ノ海ニ

風土情直ニ上リ云ハ必ス

シテ皇族ノ特權ヲ失フ不可

ナリト爲サス

然ルニ皇族ノ特權ヲ失フニ至ル

ハ國ノ隨意ニシテ清國ノ風土

トシノ主辰ヲ得（中）ニホスト
信

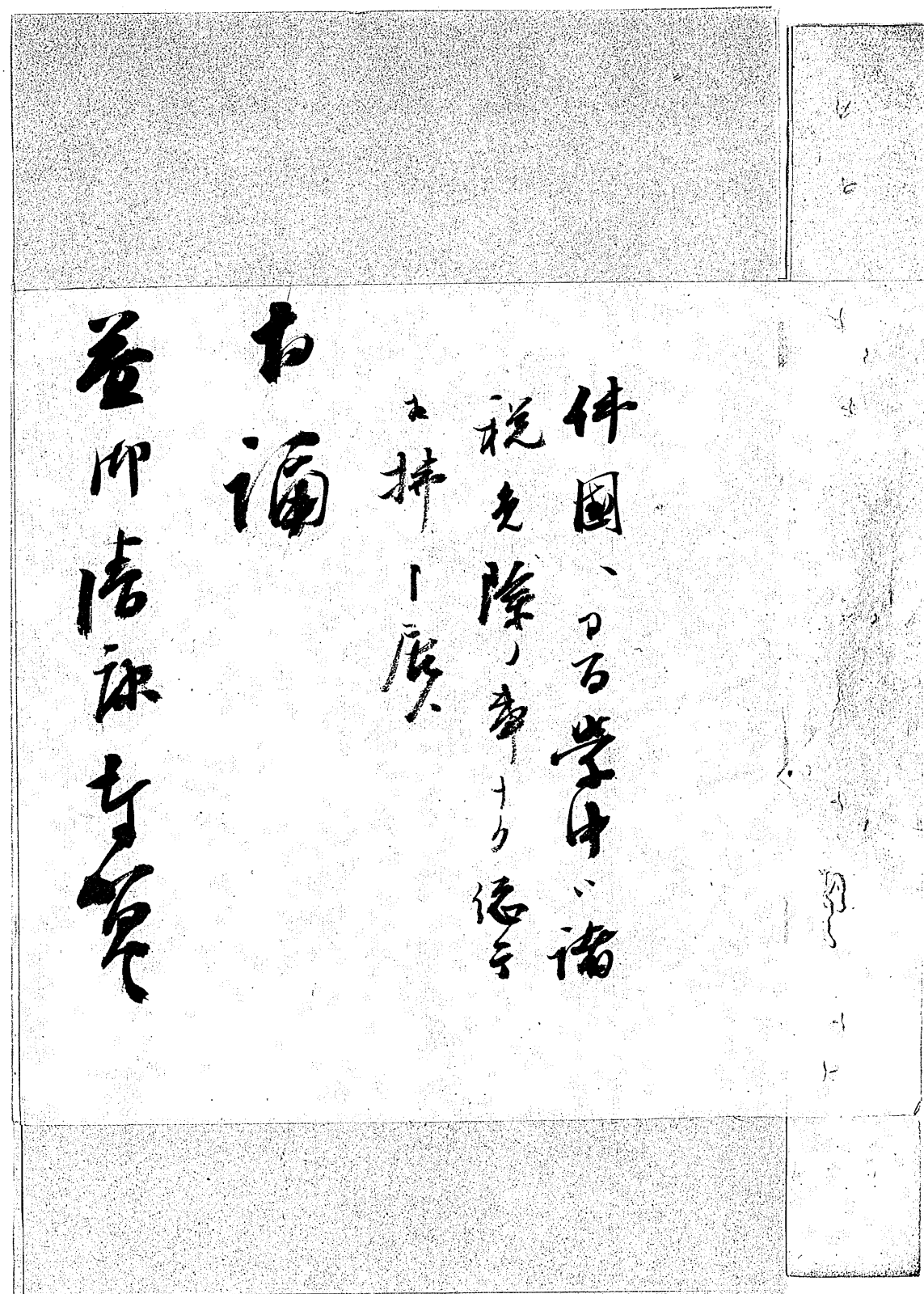
大不取敵ハ五河上リ

何事相合ニ事重ク

平家以對

月日 大月

大達老老



3-2855

0453

修名先年承院を
陛下日活政之節
諸種免除、
佛國、日國に在り
ルに及、紹介状持
参其他各國に
日平に候所、各々
所請を以て

花名トカ又ト、諸君

免除ト續ト、玉下

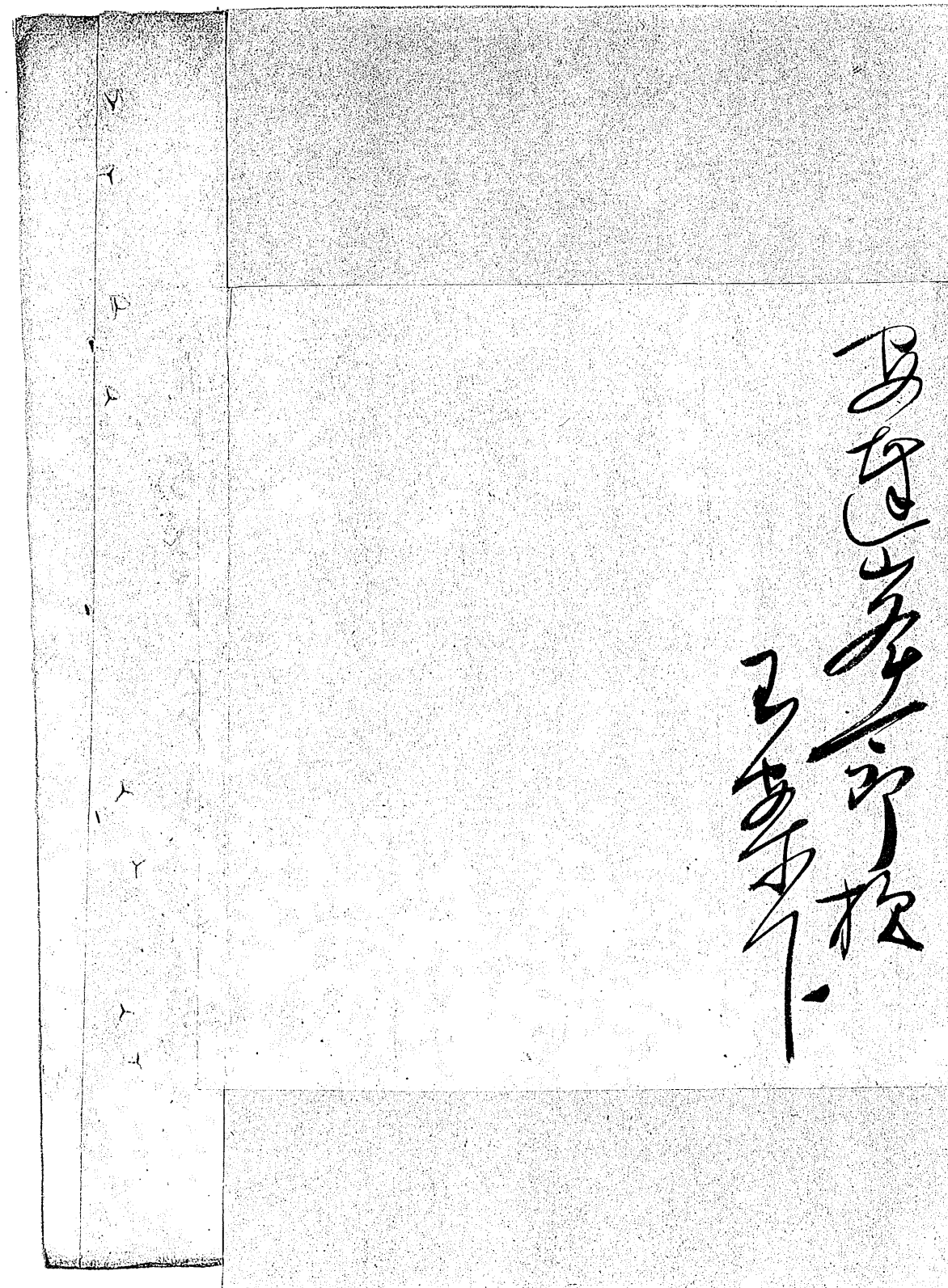
人事ト、右ト、右ト、右ト

田舎ト、野ト

一日ト、右ト、右ト

山邊ト、右ト

好威明下等江漢等事多事一傳維新
 當德川氏都大輔飲酒而後行中如爲な
 る名義主名親之免除と交れん一故に
 御下江漢等事多事一傳維新
 會之武典より大使之資格と以てる事多事
 武典より後大君親多事一故に
 御下江漢等事多事一傳維新
 之傳より佛事多事一傳維新
 除せられん様之文多事一傳維新
 明後年正月十八日
 法皇第一
 外務省
 安部嘉事官殿



安部公房
下

3-2855

0461

文書課長

明治四十一年二月五日發

明治四十一年二月五日
起草
日發遣

次官

副官

あき

主任

松島

菊地

機

密

吉原内務省

機密第2

號

井次郎

トハト五ニ家屋税免除ノ特典ヲ

典付ル件

明治四十一年三月十日發

外務省

第ヲヨリ日本ニ留シ目下府内大久保村西ノ番
地在住ノ土爾其國特許五巴爾塔先年大久保村後
場ノ家屋税納付ノ智徑ヲ受ケル事左ノルハト五ハ
其當時家屋税免除ノ特典ヲ享有シテ今法國
公使館ニ申出タル事ハ今般同公使館員來有ノ
上公使トナク右取計方申出有之ハ因テ本省ニ於テハ
熟議ノ結果左ノルハト五ニ免除ノ特典ヲ与フルコトニ

有誠ヲ決シテ蓋シ外國ノ元首及^{使臣}其外來者カ免
 稅其他ノ特權ヲ享有スルハ國際法上ノ原則ナキ其ほか
 者ハ元首^又使臣ニ伴フ場合ノ外ハ免稅等ノ特典ヲ有
 セサルコト勿論ニシテ假令外國君主ノ近親ヲ^{トモ他}免稅ニ
 對シテ免稅其他ノ特典ヲ与ル^{ナリ}事^ハ十國ノ條約ニ無之
 此^下時ニ一國政府ノ對^{スル}行政上ノ要害トシテ免稅ノ
 特典ヲ与ルコトハ^{難シ}難^シヤ^ト非^ス非^ス然^ルモ^ハ諸外國ニ於テ
 其^ハ例^ハ抄^シカ^ルル^ハ例^ハニ有^ス三^ノ事^ハ本件ノ場合ニ於テトモ
 五^ハ八^ノ外國^ハ其^ハ事^ハニ^テ免稅^ノ特典ヲ^ハ諸國^ニ宣^ス收^メ地^ニ位置^ステ清朝
 ヲ与ヘラレ居ル^ハ止^メ帝國政府ニ於テ之ニ免稅ノ特典
 ヲ与スルコトハ^ハ國際法上^ニ市^ノ開^ノ後^ニ其^ハ例^ハニ有^ストモ
^{トモ}手^ノ方^ノ國^ニ對^{スル}市^ノ開^ノ後^ニ其^ハ例^ハニ有^ストモ^ハ親善^ノ友誼^ノニ
 對^{スル}又^ハ之^ハ蒙古ト其^ハ隣國ノ關係ニ照シテ特^ニ免稅ノ
 特典ヲ蒙古王ニ与^ス以^テ蒙古ト帝國政府ト間ニ特^ニ典ノ

外務省

好望ヲ結フコトハ帝國將來ノ政略ニ當リ正ニ其意ヲ
 得ル所ト思料ス又右記各王ニ免状ノ付与スル
 ノ件ハ之ヲ内閣ニ解付ニ出スル決シテ達仕ノ事
 ト断斷スルコトヲ得サル筈ト有テ是レ外國ノ元首
 及使臣等國法上ノ義務トシテ帝國力免状ノ
 特典ヲ付与スルコトヲ要スル場合ニ於テハ我國現行ノ
 法制ハ内閣法中何等明カニ據ケ在ラズ即何等
 内閣法規ノ明文ニ依ラズ免状ノ取柄ヲ為シ得ルハ
 二有之ハハ付銭現行法免状ノ解付トシテ外國ノ元首ニ
 付シ免状ヲ為スルヲ得ル場合ハ(一)國法上ノ義務
 ニ應ズル場合ト(二)國法上ノ義務ニハ非サレトモ好意上
 特ニ付与スル場合トノ二者ヲ包含スルコトヲ解スル
 必要トスヘリ本件トハ(一)トモ同シ然レハ好意上
 免状ノ特典ヲ付与スルコトヲ希求シテ法規ニ違反

外務省

秘

方主

以勝の上

米杵島

海反

あき

声

土爾扈特郡王 巴爾塔ニ対スル家屋税免

降ニ関シ在本邦支那公使ヲ申出ノ件

本邦番草ノ目的ヲ以テ目下府下大久保村西七八番

地在任、蒙古古ト来ト郡王ニ対スル家屋税ニ関シ所轄

村役場ヨリ左記ニ送召喚状ヲ發シ、同郡王ハ右

外務省

家屋税ニ対シ免降ノ特典ヲ言有シタシト希望ヲ具シ

在本邦支那公使ニ申出タル趣ヲ以テ今般同公使館長

来省ノ上公然トシテ取斗方申出アタリ依テ應急ニ措置

トシテ本件ニ関スル首議決定スル迄當該村役場ニ桂テ同郡

王ニ対シ強知振込等ノコトナキ様取調請負ニ付東

京府廳主任官ニお合テ所ナキ

明治四十一年一月廿五日 取調課 木田

大記(居候状字)

家屋税ノ件

来ル即日午後 時出頭セラルベシ

但

明治四十年二月二日

大久保村役場印

西七八番地

トルハウトオウ版

出頭ノ節状字持参差出セルベシ

外務省

大臣

次官

陸軍省



武田書記生稿

松島

機密

機密

ト米下郡王巴爾塔、免稅特典ニ関スル件

菊地

一、蒙古ノ國際法上ニ於ケル地位ヲ按スルニ其ノ領土ハ清

國領土ノ一奇ヲ成シ其ノ王ハ清國皇帝ニ對シ服從ノ関

係ニ立ツ、其ヲシテ國際法上之ヲ附庸國 (Vassal State)

ト稱スルヲ妥當ナリトス、~~然~~而シテ國際法ニ未タ蒙古ヲ

以テ外交上ノ單位タル國家ノ能力ヲ有スルモノト認メサルカ

外務省

故ニ其ノ元首タル郡王ハ外國君主ノ有スルカ如ク、國際法

上ノ特典ヲ享有スルモノニ非ズ、將又蒙古王ハ其ノ格式

清國皇族ノ列ニ在ルカ故ニ外國ノ皇族タル身分ニ於テ

治外法權及免稅ノ特典ヲ享有シ得、キヤノ問題存

スト、臣外王君主ト同俸セサル皇族ニ於テ、特權免

除ヲ享有セサルヲ、國際法上ノ原則トナスカ故ニ其ノ

以スルモ蒙古郡王、特權免除ハ、國際法上ノ根據ヲ有

スルヲニ非ス

二、然レトモ一カ外國ノ皇族ニ對シ國際法上ノ特權免
除ヲ享有セシムルハ實際間其ノ例ニ乏シカラス是レ素ヨリ
王家百ノ特別ノ好誼ニ基キ少シテ國際法上ノ問題
ニ非ス故ニ帝王政府カ以テ種ノ特典ヲ恩惠トシテトル
ホト郡王ニ許スルト否トハ^全實ニ帝王政府ノ自由裁量
ノ範圍ニ屬ス

外務省

三、トホト郡王ハ蒙古^種中最モ勢力アリ團體ノ元
首ニシテ情ヲ政府トモ歴代之ヲ賓客友邦トシテ好
遇シ来レルノ事實アリ而シテ其ノ身分情ヲ^{取扱}玉皇族ノ^{各階級}
中位ニアリ帝王政府ハ外交上善隣^{關係}ニ政府並ニ
皇室ニ對シ特ニ好意ヲ表スル結果以テ勢力アル
トルホト郡王ニ對シ特別ノ待遇トシテ或種ノ免稅ヲ
許スルヲ至^至ナリト思料ス

四 本件免稅ニ関シ玉内法ノ規程ヲ查直西敷スルニ玉際
情上玉家ノ義務トシテ現ニ免稅ニツアル事ハ玉帝國
(諸例ハ外國大使公使等)

稅法中興ノ免稅ニ関シ何等規定スル所ナシ是レ思フ
ニホテ

玉帝玉ノ法製ハ玉際情上玉帝玉ノ義務ヲ裁断スル
法律ノ規定ヲ待タスニテ
ハ玉當然玉内法上ノ效力ヲ有スル事ハ如ク論法ヲ

以テスル本件ハ素ト玉際情上ノ義務トシテ免除スルモノ
ニ非サルカ故ニ玉内法ニ於テモ亦免稅ノ限ニ非サルカ如

外務省

レト虽以ノ莫ニ関シ列玉ノ慣例ヲ看ミ
列國
政府
其ノ
方ス

クレシヨシニ於テ以ノ種ノ免稅ヲ許スルハ例勘ナカラス

故ニ本件モ玉帝玉政府ノ認定ニ於テ玉内法上又免稅
得ル

ヲ許スルハ得ルモノナリト
總釋ス

明治四十年一月廿九日

明治三十二年二月七日接受

取調書

受第 二二一五三 沛

早松

大上董

次友

大上件

有洞洋

兼地

10

内務省紀乙第二八號
廿月五日送來二号ヲ以テ家屋宛
免除ノ後ニテ汚染云々、如キ承
右ニ府会、決案如何ニ依
ヘキ節ノミ、ニテ、其ノ件、如キ
之ノミ、在テ、汚染云々、如キ宛宛
特典ヲ與フニ方、可照、在、同
其ノ首、在、府会、事、及、通
多、際、右、様、子、に、お、来、下、さ、さ、す
旁、女、及、由、際、多、く
以、同、年、一、月、二、月、六、日
内務省 吉原三郎

明治三十二年二月七日接受

内務省



外務省及農商務省に送付



申度乙極外三平 あり

管下豊多摩郡大久保村在住蒙古王トホル
ハトウニ賦課シタル府税ニ関シ先般両交渉
ノ次才王有之レ處右府税賦課ニ免除スル
事ニ決定セ成テ了知セ成度此段
申進セ

明治三十一年二月二十日

東京府内務部長 堀 信次



外務省参事右安達峰一 殿

明治三十一年二月二十日 東京府 半二

東京府 半二

文書課長

明治四十一年二月二十二日

明治四十一年二月二十二日

大月

政本

松島 菊池

明治四十一年二月二十二日

送第

外務省

津島

本邦

清國公使宛

林大臣

トルハト王ニ家屋税免除ノ

特典ヲ與フル件

外務省

名

以書翰致送上候所者第ニ本邦ニ留學中
お成居る蒙古土商尾特郡王巴爾塔殿下ニ於
テハ家屋税免除ノ特典ヲ享有被致及旨閣
下ニ決申出必更趣ヲ以テ各年貴國公使彼員
向差遣ニ上公然トナク右取計方ニ依る要
敬承ス 本件ハ帝國拒絶ノ解釋問題ニ屬シ
本大臣ノ一存ヲ以テ速答致難ク莫ニ帝國政府
ニ於テ篤ト熟識ヲ懷シ貴上何分、低後日照覆

當有特權ヲ口頭ヲ以テ

可致与最ニ申達置次并ニ有之矣帝業方ノ如ク
外國ノ元首使臣^節及其ノ之ニ随伴タル者カ免税
其他ノ特典ヲ享有スルハ國際法上ノ原則ニ有
之矣其以外ノ者ハ假令一國君主ノ近款ナリ
トモ他國ハ之ニ對シ免税其他ノ特典ヲ附與
スル義務ヲ負フモハ無之矣而レテ帝國税
法ノ解釋トシテハ前記帝國政府カ國際法上
ノ義務トシテ免税ノ特典ヲ附與スル者ニ對シ
免税スルハ當然ニ有之矣モ國際法上帝國政府カ
免税ノ特典ヲ許與スル義務ヲ負ハサル者ニ對シ
免税スルハ一ニ帝國政府ノ好意ニ基ク例外的
優遇ニシテ特別ノ行政命令ニ依ルハ外不可能
ノ域ニ有之矣本件ノ場合ニ於テ巴爾提殿下
ハ貴國皇族タル地位ヲ保有セラルルニ止マルヲ以テ
帝國政府ハ國際法上ノ義務トシテ^同殿下ニ免
税ノ特典ヲ享有セシムルコトヲ要スルモノニ非サル

外務省

こと勿論ニ其ハ其帝國政府ハ貴國ト帝國
 トノ間ニ現存スル親善ノ友誼ニ鑑ミ特別ノ
 詮議ヲ以テ巴爾格殿下ニ家屋稅免除ノ
 特典ヲ享有セシムル事トスルハ其帝國政府
 好意ヲ示スルニ期待致スル本末第同
 下ノ半南東有本中南地^同殿下ハ所被賜
 有威極其友也國政府及殿下ニ於テモ亦スヤ
 帝國政府ノ好誼ヲ錄トセラルスト思料
 外務省
 是意右ノ通り相違ナク其旨ハ閣下ニ付シテ
 諸ニ教示ヲ志シタル所也